

徳宗時代の三つの唐・吐蕃会盟（建中会盟・奉天盟書・平涼偽盟）

——安史の乱後の内治のための外交——

はじめに

本稿では、徳宗（在位七七九～八〇五年）の時代に行われた三つの唐・吐蕃会盟、即ち、建中会盟（七八三年）、奉天盟書（七八三年十月～七八四年正月）、平涼偽盟（七八七年）を取り上げ、その歴史的意思や三会盟が唐の政治・軍事・外交全般に与えた影響について考察する。

徳宗時代の特徴は、安史の乱以後、国内に反側藩鎮、外に吐蕃・ウイグルの強国が控えていた事で、各々が唐王朝を圧迫した為、この時代の唐は内外ともに多難な時期であった。

唐は、建中四年（七八三）の正月に吐蕃との国境清水（甘肅省清水県）、七月に長安城の城西で、各々吐蕃の宰相らと会盟し、同七月にはラサに使節を派遣し、ラサで吐蕃王チソンデツェンとも会盟して、国境の劃定等を約した（建中会盟）。唐・吐蕃会盟の形式は、例えば長慶会盟において、長慶元年（八二一）に長安、長慶二年（八二二）にラサで各々会盟が行われており、互いの都で一回ずつ会盟した。²⁾ 建中会盟では、国境（清水）と双方の都（長安・ラサ）で計三回の会盟

菅 沼 愛 語

が行われた。次いで、朱泚の乱（七八三年十月～七八四年六月）の時、乱を避けて奉天（陝西省乾県）に逃亡中であった徳宗は、援軍の派遣を申し出た吐蕃に対して盟書（奉天盟書）を与え、吐蕃が長安を奪回した暁には報賞として安西四鎮と北庭を割譲する事、毎年絹一万匹を贈る事を約した。更に貞元三年（七八七）閏五月、唐は平涼（甘肅省平涼市）において吐蕃と会盟（平涼偽盟）を行ったが、吐蕃の大相尚結賛（シャンギェルツェン）の謀略によって唐の使節六十餘人が捕縛された。

この時期の唐の国内情勢を概観すると、建中二年（七八一年）、成徳節度使李宝臣の息子李惟岳、魏博節度使の田悅、平盧節度使の李正己、山南東道節度使の梁崇義が連合して反乱を起こした。翌年の建中三年（七八二年）四月には、朱滔（盧龍）・王武俊（成徳）・田悅（魏博）の河北三鎮が連合して反乱し、十一月には淮西節度使の李希烈も反旗を翻し河北三鎮とも連繫した。建中四年（七八三年）十月には朱泚が叛き長安を占領した為、徳宗は長安を棄て、長安西北の奉天に逃走した。この翌年の興元元年（七八四年）二月には朔方節度使の李懷光が叛き、徳宗は奉天から更に梁州（陝西省漢中市）に逃走した。こ

の様に、七八一年から七八四年にかけて毎年藩鎮が反乱を起こしている。藩鎮の乱については、唐の軍事体制や内政との関連で、これまで論じられてきた⁽³⁾。筆者は本稿で、徳宗時代の藩鎮の乱を、この時期の唐・吐蕃会盟との関連性という観点から論じたいと思う。

唐はおそらく内憂を乗り切る目的で吐蕃と会盟したと推察される。本稿では三会盟を中心に、唐が難局をいかに乗り越えようとしたか、その推移について考えたい。

尚、奉天盟書に関する記述は『旧唐書』『新唐書』『冊府元龜』『資治通鑑』等の基本史料に明確に記されていない。ただ、徳宗が吐蕃の宰相尚結贊と尚覽鑠に与えた勅書（「賜吐蕃宰相尚結贊書・第三書」「賜吐蕃将書」等）には「奉天盟書」「奉天盟約」「奉天之約」といった言葉が見える。奉天盟書については、劉小兵氏、王素氏らが考察しているが、日本ではほとんど取り上げられる事はなかった。⁽⁴⁾ 本稿では奉天盟書の盟約内容を明らかにし、盟約が行われた歴史背景、平涼偽盟への影響等について考察する。

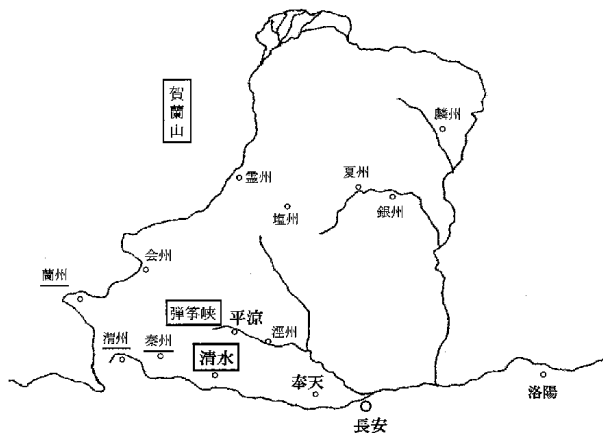
本稿で取り上げる会盟の呼称であるが、「建中会盟」は年号で呼ぶ。「奉天盟書」に関する呼称は先行研究でも定まっておらず、劉小兵氏は奉天之盟と呼び、王素氏は奉天盟書とも奉天盟約とも称している。筆者は、これは徳宗が吐蕃に与えた盟書（誓約書）であると考えるので、本稿では奉天盟書と呼ぶ事にする。「平涼偽盟」⁽⁶⁾は、『資治通鑑』では平涼劫盟と称している。確かに、吐蕃軍が会盟を劫略したという意味では、劫盟という表現も肯げなくないが、吐蕃が会盟に至るまでの過程において詐術や策謀を弄し（唐の將軍馬燧に賄賂を贈って懐柔し、盟会使の渾瑊を捕縛する為に金の械を用意した）、唐の使節を捕

縛する目的で会盟の場を設けた事を考慮すると、偽盟という呼称の方が適切だと考える。尚、本稿の年号は漢文史料と同じ太陰曆に基づく。また、引用史料の訳および傍線は筆者が付した。

第一章 建中会盟への道

本章では、建中会盟に至る唐・吐蕃間の外交交渉を取り上げ、建中二年（七八一年）以降、相次いで勃発した藩鎮の乱との相関等について考察する。唐・吐蕃間の外交交渉と藩鎮の乱の时期的な相関については「年表」も参照されたい。

（一）安史の乱の時の唐・吐蕃関係



長安周辺の地図：下線は安史の乱後の吐蕃の占領地。四角で囲んだ地点は建中会盟で決まった国境地点。

安史の乱が勃発した直後、唐が河西・隴右の軍勢を安祿山討伐の為に東方に移動した隙を衝いて、吐蕃は河西・隴右を占拠した。『新唐書』卷四十地理志四より吐蕃の占領地を挙げると、宝応元年（七六二）に秦州・渭州・涇州（以上甘肅省）・臨州、広徳元年（七六三）に河

年表：唐・吐蕃の和睦交渉と藩鎮の乱

年代	唐と吐蕃の和睦交渉・会盟および吐蕃の動向	藩鎮の反乱および唐の藩鎮政策
大暦14 (779)	8月 徳宗が韋倫を吐蕃に派遣し、吐蕃人捕虜500を返還【吐蕃との和睦交渉を開始】	8月 楊炎が「兩税法」に関する上奏を行う
建中元 (780)	4月乙未朔 劉文喜（涇州裨將）が涇州で蜂起し吐蕃に支援要請。4月癸卯、韋倫が吐蕃より帰国し、5月乙酉、徳宗は韋倫を再度吐蕃に派遣。5月庚寅 劉文喜が部下に殺されて乱は平定【唐との和睦交渉が始まった為、吐蕃は劉文喜の乱を支援せず】12月 韋倫が宰相の論欽明思ら55人を伴って帰国	正月 「兩税法」の施行開始 → 藩鎮が不満を抱く
建中2 (781)	3月 崔漢衡が吐蕃に派遣される。12月 常魯が論悉諾羅と吐蕃から帰国し吐蕃王の要請（敵国の礼の適応・国境劃定等）を伝え、徳宗はこれを許可【徳宗は、敵国の礼・国境劃定等を吐蕃に許可】	正月 李宝臣（成徳節度使）が死去し、息子の李惟岳が節度使職の継承を請願するが、徳宗はこれを許さず。5月李惟岳は田悦（魏博）・李納（平盧）・梁崇義（山南東道）と連合して拳兵【成徳・魏博・平盧・山南東道が連合して反乱】
建中3 (782)	4月吐蕃が中国人捕虜800人を唐に返還。9月 崔漢衡が区頰養を伴って吐蕃より帰国。10月 樊澤と吐蕃の大相尚結贊が会盟の時期を決定【会盟の為の事前交渉】	4月 盧龍・成徳・魏博の三鎮が連合し、再度反乱。11月 盧龍節度使の朱滔、成徳節度使の王武俊、魏博節度使の田悦、平盧節度使の李納が各々王を自称。淮西節度使の李希烈が蜂起【盧龍・成徳・魏博・平盧・淮西が反乱】
建中4 (783)	正月 唐と吐蕃が清水において会盟。【建中会盟：清水での会盟】7月 唐と吐蕃が長安において再度会盟。【建中会盟：長安での会盟】10月 「朱泚の乱」勃発。徳宗は奉天に逃亡【783年10月～784年正月に徳宗は「奉天盟書」を吐蕃に与える】	10月 涇原軍が長安で蜂起し、朱泚を推戴したので徳宗は奉天に逃亡【朱泚の乱勃発】
興元元 (784)	正月 吐蕃の尚結贊が朱泚討伐を請願した為、徳宗は吐蕃に出撃を命令。4月 唐の渾瑊と吐蕃軍が、武亭川で朱泚軍を撃破。5月 朱泚が吐蕃に金帛を贈賄し、吐蕃は大疫を理由に撤退。6月 敗残の朱泚は吐蕃への逃走を図るが、部下に殺される【吐蕃は唐と共に朱泚軍を撃破するが、その後、朱泚から賄賂を得て撤退】	2月 李懷光が反乱を起こし、徳宗は奉天から山南の漢中に逃走。4月 渾瑊と吐蕃軍が、武亭川で朱泚軍を撃破。5月 唐軍が朱泚軍を撃破し、長安を回復。6月 敗残の朱泚が部下に殺され、朱泚の乱が平定

表1：軍隊の動き：安史の乱勃発～貞元3年（787）

年代	軍勢の移動【出典】	移動の理由・移動の波紋	軍の動き
天寶14 (755)	河西・隴右節度使の哥舒翰に河西・隴右の軍勢を率いさせ、洛陽を占拠している安祿山を討伐する為、潼関に駐屯させた【『旧』吐蕃伝】	吐蕃軍が河西・隴右に侵攻し河西・隴右を占領	西→東
大暦6 (771)	8月、淮西節度使李忠臣が2千の兵を率いて奉天（陝西省乾県）に防秋兵として駐屯【『通鑑』224大暦6年】	この時期は吐蕃が唐にとって脅威だった為、各地の兵力を防秋兵として提供させて、吐蕃への防衛力を強化していた	東→西
大暦8 (773)	永平節度使令狐彰は、毎年兵3千を京西の防秋に送っていた【『通鑑』224大暦8年2月壬申】		
大暦8 (773)	8月、盧龍節度使朱泚は弟朱滔に5千の騎兵を統率させて涇州（甘肅省）の防秋に派遣【『通鑑』224大暦8年】	吐蕃と和睦交渉が始まったので、河北三鎮を討伐する為に吐蕃防衛の為の軍勢を河北に移動し、河北諸鎮の平定戦に投入	西→東
建中2 (781)	2月、京西の防秋兵1万2千人を関東に駐屯させた【『通鑑』226建中2年】		
建中4 (783)	正月戊戌（清水会盟から11日後）哥舒曜に鳳翔・邠寧・涇原・奉天・好時の行營兵万余人を統率させて李希烈討伐に派遣【『通鑑』228建中4年】	清水会盟（建中4年正月丁亥）で吐蕃と和睦したので吐蕃防衛の軍勢を李希烈討伐に投入	西→東
建中4 (783)	10月、長安西北の涇原軍5千（吐蕃防衛の為に配備）を李希烈討伐の為に襄陽（河南省）に派遣【『通鑑』228建中4年】→長安で反乱を起こし朱泚を推戴【朱泚の乱が勃発】	長安会盟（建中4年7月）で吐蕃との和睦を深めたので涇原軍を李希烈討伐に再投入→この涇原軍が反乱【朱泚の乱勃発】→徳宗は奉天に避難	
貞元3 (787)	貞元3年、関東の兵で徴集されて京西にある防秋兵は17万人であった【『通鑑』232貞元3年7月】	前年8月以降の吐蕃の入寇に対応して兵力強化したのであろう	東→西

※略号：『旧』 = 『旧唐書』、『新』 = 『新唐書』、『冊』 = 『冊府元龜』、『通鑑』 = 『資治通鑑』

史 葱州・蘭州・岷州・廓州（以上甘肅省）が各々吐蕃に占領された。また、

吐蕃軍は広徳元年には長安を十五日間占領した。

安史の乱勃発後、唐は、邠州（陝西省彬縣）に邠寧節度使、鳳翔（陝西省鳳翔縣）に鳳翔節度使、坊州（陝西省黃陵縣南）に鄜坊節度使、涇州（甘肅省）に涇原節度使を各々新設して西北の边防を強化し、關東（關内道と隴右道以外）から防秋兵を徵集し奉天・涇州等に駐屯させ、長安西北の軍事力を補強して吐蕃の入寇に備えた。⁽⁸⁾防秋兵の徵集、安史の乱勃発直後から平涼偽盟が行われた貞元三年（七七七）までの主な軍隊の移動を「表一」にまとめた。これにより、時期によって唐がどの方面の防衛を重視していたか理解できると思う。

また、代宗時代、吐蕃の入寇が止まらなかった為、唐は吐蕃の使節を尽く拘束した。対する吐蕃も、大曆六年（七七二）に派遣されてきた唐の使者輿損を抑留する（『資治通鑑』卷二二四）等、兩國の外交交渉は円滑に行われなかった。

（二）徳宗の内政再建と唐・吐蕃間の和睦交渉の開始（大曆十四年～建中元年）

大曆十四年（七七九）五月に即位した徳宗は、三ヵ月後の七七九年八月、太常少卿の韋倫を吐蕃に派遣し、代宗時代に拘束した使者を含む吐蕃の捕虜五百餘人を返還した（『旧唐書』卷十二徳宗紀、卷一九六吐蕃伝、『冊府元龜』卷九八〇外臣部通好、『資治通鑑』卷二二六）。徳宗は、即位直後より財政の再建と反側藩鎮への削藩政策を実行している。即ち、即位の三ヵ月後の大曆十四年（七七九）八月、宰相の楊炎が兩税法に関する上奏を行い（『唐会要』卷八三租税上）、翌年の建中元年（七八〇）正月より兩税法の施行を開始した。⁽⁹⁾更にこの翌年

の建中二年（七八一）正月、成徳節度使李宝臣が死去した時、徳宗は、息子の李惟岳が節度使職を世襲する事を認めず、河北諸鎮に対する抑制策を試みた。楊炎の上奏と韋倫の吐蕃への派遣が同じ大曆十四年八月に行われた点からも、即位当初の徳宗が、安史の乱による痛手からの財政再建や唐王朝による中央集権化を重視した為、吐蕃に対して融和策で臨んだ事が伺える。⁽¹⁰⁾代宗時代、吐蕃との外交関係は良好ではなかった為、徳宗はまず吐蕃に捕虜五百餘人を返還し、これを和平交渉の糸口となして吐蕃との関係改善を試みたと思われる。

韋倫は、翌年の建中元年（七八〇）四月、吐蕃より帰還した。徳宗は、五月、韋倫を再度吐蕃に派遣し、十二月、韋倫は吐蕃の論欽明思ら五十五人を伴ってラサより帰国した。建中三年（七八二）四月には、吐蕃が捕らえていた中国人の將士・僧尼など八百人を唐に返還した。吐蕃王チソンデツェンは、徳宗が返還した吐蕃人捕虜五百に対する返礼として捕虜を唐に返還したのであった（『旧唐書』吐蕃伝）。こうした捕虜の返還が、兩國の和平交渉の再開と交戦停止の契機になった事は、後に建中会盟の盟文で言及された。⁽¹¹⁾

尚、韋倫が吐蕃から帰還したのと同じ建中元年（七八〇）四月、涇州で裨將の劉文喜が反乱を起こし、吐蕃に自らの子供を人質として送り救援を要請したが、吐蕃は劉文喜の援軍要請に応じなかった（『資治通鑑』卷二二六）。吐蕃は捕虜の返還を契機に唐との和睦交渉を開始した為、劉文喜を支援しなかったと思われる。その後、涇州は日照りに見舞われて反乱軍は消耗し、蜂起から一ヵ月後の建中元年五月、乱は終息した。徳宗は、帰国した韋倫を直ちに吐蕃に再派遣しているが、この様な国内の不安定な状況にあつて、吐蕃との和平の確立が急

務であると判断したのかも知れない。

(三) 河北諸鎮の反乱と吐蕃への「敵国の礼」の承認と国境劃定

建中二年（七八一）正月、成徳節度使李宝臣が死去し、息子の李惟岳が節度使職の継承を徳宗に請願したが、徳宗がこれを拒否した為、李惟岳は、魏博節度使田悦、平盧節度使李正己、山南東道節度使梁崇義と連合し反乱を起した。徳宗は建中二年二月、京西の防秋兵二万二千を関東に駐屯させて河北諸鎮の乱に備えた（『資治通鑑』卷二二六）。また、徳宗は建中二年三月、殿中少監の崔漢衡を吐蕃に派遣した。この時、徳宗は、熱心な仏教信者であった吐蕃王の要請に応じ、仏僧の良琇と文素もラサに派遣している（『冊府元龜』卷九八〇外臣部通好、『唐会要』卷九七吐蕃伝）。吐蕃との和睦交渉は前年度より順調に進んでおり、徳宗は吐蕃防衛の為の防秋兵を東に移して河北諸鎮の乱に対応させ、吐蕃に対して使者や仏僧を派遣して吐蕃王との親睦を深めたと考えられる。

建中二年十二月、入蕃判官の常魯が吐蕃の大臣論悉諾羅らを伴って帰国し、吐蕃王チソンデツェンの掲げる三つの要請を徳宗に伝えた。三つの請願とは、①吐蕃は臣下ではないので勅書の表現を改める事、②靈州（寧夏回族自治区）の西は賀蘭山を国境とする事、③盟約の際には「景龍二年の勅書」に従う事であった。徳宗は吐蕃王の要求の全てを承認し、吐蕃と国境を劃定して会盟する事となった（『旧唐書』吐蕃伝、『新唐書』卷二二六吐蕃伝、『冊府元龜』卷九八一外臣部盟誓、『資治通鑑』卷二二七）。

ここで筆者が注目したのは、①の勅書の表現の改定と②の国境線を唐が承認した事である。前者は徳宗が吐蕃に対する「臣下の礼」を改

め「敵国の礼（＝対等の礼）」の適応を許可した事、⁽¹⁴⁾ 後者は徳宗が吐蕃の提示した国境線を認めた事を意味する。唐が吐蕃に対して敵国の礼を承認する事も、国境線が東側に大きく後退した事も、従来なかった出来事であり、唐の外交姿勢の大きな変化が見て取れる。

まず、①の「敵国の礼」について少し詳しく見る。吐蕃が敵国の礼の適応を初めて請願したのは、開元二年（七一四）十月であったが、玄宗はこれを拒絶した（『資治通鑑』卷二二一）。また、建中元年（七八〇）五月、ラサより帰国した韋倫が徳宗に対し、「徳宗自らが載書を成して吐蕃と会盟して欲しい」と吐蕃王の請願を伝えた際、宰相の楊炎は、吐蕃は「非敵（敵国ではない）」と言つて、徳宗が自ら載書を作る事に反対した（『資治通鑑』卷二二六）。しかし、一年後の建中二年十二月、徳宗は「前相楊炎不循故事、致此誤爾。（前宰相の楊炎が故事に従わなかったので、この様な誤りを犯してしまった。）」と弁明し、この二ヶ月前に死去した楊炎に責任を転嫁し、吐蕃王の要求どおり勅書の表現を改めて、「貢獻」を「進」、「賜」を「寄」、「領取」を「領之」に各々訂正した。

次に、②の国境劃定について見る。唐と吐蕃は、玄宗時代の開元会盟の時、青海東南の赤嶺を国境として定めた。その後、安史の乱が勃発すると、吐蕃は安祿山討伐の為に唐軍が東方に移動した隙を衝いて河西・隴右を軍事占領した。吐蕃王が今回、国境として請願した靈州の賀蘭山は河西よりも東側にあり、同地に国境を定めると唐は吐蕃による河西・隴右の軍事占拠を認めた事になるが、徳宗はこの要求も承認した。

また、③の「景龍二年の勅書」⁽¹⁶⁾ には、『旧唐書』吐蕃伝によれば

「唐使到彼、外甥先與盟誓、蕃使到此、阿舅亦親與盟。(唐の使者が吐蕃に至れば、外甥の吐蕃王が先に唐使と共に誓い、吐蕃の使者が唐に至れば、舅の唐皇帝がまた自ら吐蕃の使者と共に盟約する)」と記されておられ、舅の唐皇帝と甥の吐蕃王が盟約を交わす際の盟誓の方法が定められていた。徳宗は、これも受諾した。

この様に唐が吐蕃に大きく譲歩した背景には、河北諸鎮の乱という内憂があり、徳宗は藩鎮討伐に兵力を集中する為、吐蕃と和して外患に備える必要があったと考えられる。

一方、吐蕃の情勢であるが、『旧唐書』吐蕃伝によれば、吐蕃ではこの頃、政權交代があり、主戦派の大相尚結贊が失脚して和平派の副相尚結贊が大相に昇格した。尚結贊は「唐と国境劃定して会盟する事」を提唱し、吐蕃王チソンデツェンも尚結贊に賛同して唐との会盟を決断した。唐が吐蕃との会盟を通じて国内の安定を図ったように、吐蕃は、唐との会盟によって河西・隴右の占領を既成事実として唐に認めさせようとした。

翌年の建中三年(七八二)、唐・吐蕃間で引き続き交渉が行われた。即ち、建中三年九月、崔漢衡が吐蕃の大相区頰賛を伴って帰還し、十月には樊澤が吐蕃に赴いて原州で吐蕃の大相尚結贊と会談した。そして、賀蘭・清水等を国境とする事を決め、会盟を翌年正月に清水で行う事を約した(『旧唐書』『唐会要』吐蕃伝)。この時期、河北諸鎮の反乱は一旦は沈静化に向かったが、建中三年四月、盧龍節度使朱滔、成徳節度使王武俊、魏博節度使田悦が連合して反旗を翻し、十一月には朱滔(盧龍)、王武俊(成徳)、田悦(魏博)、李納(平盧)が各々王を自称し、淮西節度使の李希烈も蜂起して河北諸鎮とも連繫した。

この様な国内情勢の更なる悪化により、唐にとつては吐蕃との会盟は、より重要性を増したと思われる。

第二章 建中会盟(七八三年)とその歴史背景

本章では建中四年(七八三)に行われた建中会盟を取り上げる。会盟の経緯や盟約内容は、『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『冊府元龜』卷九八一外臣部盟誓・建中四年条、『唐大詔令集』卷一二九「與吐蕃会清水盟文」、『全唐文』卷四三三二、『資治通鑑』卷二二八等に記されている。これらの史料に基づき、建中会盟の経緯等をまとめ、その歴史背景について考察する。

(一) 清水での会盟(建中四年正月)

建中四年正月丁亥、唐と吐蕃が国境の清水(甘肅省清水県)で会盟した。唐側の参加者は鳳翔隴右節度使の張鎰・崔漢衡・樊澤・常魯・于頔・齊映・齊抗の七名であり、吐蕃側の参加者は大相の尚結贊・論悉頼藏・論臧熱・論利陁斯・論力徐らの七名であった。唐側の出席者の氏名や吐蕃との交渉経緯等について(表二)にまとめた。吐蕃対策も含めた西方戦線の責任者である鳳翔隴右節度使の張鎰と張鎰の幕僚(齊映・齊抗)が参加し、外交使節として吐蕃に派遣され会盟の為の事前交渉を行ってきた実務官達(崔漢衡・樊澤・常魯)も参加した。

尚、会盟に際し、当初は、唐が牛、吐蕃が馬を各々犠牲獣となす事を約していた。しかし、張鎰は吐蕃との会盟を恥じ、正式な会盟にはしたくなかったため、尚結贊に対し、牛と馬は両国にとつて重要なもので羊・豚・犬の三種をもってこれに代えたいと提案した。尚結贊はこれにに応じて羝羊を犠牲獣とし、張鎰は犬と羊を犠牲獣とした。犠牲獣

については『礼記』王制に、天子が社稷を祭る時の供物は大牢（牛・羊・豕の三牲）、諸侯の供物は少牢（羊と豕だけで牛を欠いた）とある。張鎰はおそらく故意に犠牲獣を大牢から少牢に変更し、吐蕃との会盟のランクを下げたと考えられる。唐が吐蕃との会盟の際に小細工を弄する例は過去にもあり、玄宗は開元会盟の時、意図的に盟約の表現を代えている⁽¹⁹⁾。この様に唐は吐蕃が気づかないところで姑息に会盟の格下げを図っており、プライドの維持に努めていたのである。

(二) 長安城西での会盟と入蕃会盟使のラサへの派遣（建中四年七月）

清水会盟では国境が劃定しなかったため、徳宗は建中四年二月、崔漢衡を吐蕃に派遣し、吐蕃王と協議させた。六月、于頔が吐蕃の使者論刺没蔵と共に青海から帰国し、国境が定まったので区頰賛（前年九月より長安に滞在）を吐蕃に帰国させるよう徳宗に請願した。唐と吐蕃は、この交渉で国境線の最終調整を行ったと考えられる（国境交渉に関する詳細は次節参照）。

建中四年七月、徳宗は、吐蕃の区頰賛との間で再度会盟するよう宰相や將軍達に命令し、長安城の城西で会盟が行われた。唐側の出席者は、宰相の李忠臣・盧杞・関播・崔寧、工部尚書の喬琳、御史大夫の于頔、司農卿の段秀實、京兆尹の王翊、金吾衛大將軍の渾瑊らで、会盟が長安で行われた為に今回は中央政府の文武官僚が出席している事が分かる。

同じ七月、徳宗は礼部尚書の李揆を入蕃会盟使に任命し、区頰賛をラサに送り届けさせた。「入蕃会盟使」という職名から推察して、李揆の使命はラサに赴き、「景龍二年の勅書」にある会盟の形式に則って吐蕃王チソンデツェンと会盟を行ったと考えられる。

この様に、建中会盟では国境の清水、

長安、ラサにおいて計三回もの会盟が行われ、唐・吐蕃双方は十分な協議を行い、

しっかりした形式に則り、条項も細部にわたって取り決めた。

次節では、建中会盟で最も重要視された国境劃定について見ることにする。

(三) 盟約の重要条

項・国境に関する取り決

め（地図参照）

建中二年（七八

二）の和睦交渉で、

吐蕃王は「靈州の西は賀蘭山を国境とする事」を要請し、徳

宗はこれを許可した。

建中三年（七八二

表2：建中会盟（清水会盟）に出席した唐の使節達

氏名	官職および役目	経歴・会盟に参加した理由など	史料
張鎰	鳳翔隴右節度使	建中3年(782)より鳳翔隴右節度使。鳳翔隴右節度使が吐蕃対策を含めた西方戦線の責任者であったため会盟に出席したと思われる	『旧』125張鎰伝、吐蕃伝、 『新』152張鎰伝、吐蕃伝、 『冊』981
崔漢衡	会盟官	代宗の大暦6年(771)和蕃副使。建中2年(781)3月、吐蕃に派遣され、翌年9月、区頰賛と帰国。朱泚の乱の時、吐蕃の大相尚結賛のもとに派遣されて出動要請。のち平涼偽盟にも参加	『旧』122崔漢衡伝、吐蕃伝、 『新』143崔漢衡伝、吐蕃伝、 『冊』981
樊澤	不明	建中3年、入蕃計会使樊澤は吐蕃に赴き、原州で吐蕃の大相尚結賛と会談し、会盟の場所(清水)と日時(翌年正月)を決定	『旧』122樊澤伝、吐蕃伝、 『冊』981
常魯	不明	建中2年(781)12月、入蕃使判官として論悉諾羅らとともに吐蕃から帰還。吐蕃に派遣されて会盟の事前交渉を行った	『旧』吐蕃伝、『冊』981
于頔	不明	会盟後も吐蕃との交渉にあたり、建中4年(784)6月、答蕃使判官の于頔は、吐蕃の論悉没蔵と青海から帰還	『旧』156于頔伝、吐蕃伝、 『冊』981
齊映	張鎰の判官	張鎰が鳳翔尹の時から判官。張鎰に従って会盟に参加	『旧』136齊映伝、『新』150齊映伝
齊抗	張鎰の幕僚・監察御史	張鎰が寿州刺史の時から幕僚(判官)。張鎰の幕中の謀事の多くは齊抗より出た。張鎰に従って会盟に参加	『旧』136齊抗伝、『全唐文』499權徳輿「齊成公神道碑銘并序」等

年)の交渉では「靈州では賀蘭、涇州では彈箏峽の西口、隴州では清水を唐側の境界となし、その全てに碑を建て、そこが国境である事を記す」ことを約し(『唐会要』吐蕃伝)、国境地点が複数化し、全ての国境地点に境界碑を建てて国境線を明示する事も決まった。

建中四年の会盟では国境線は複数の地点まで明確化し、厳格に細部まで定められ、国境侵犯が禁止された。具体的には、「涇州の西は彈箏峽の西口、隴州の西は清水峽、鳳州の西は同谷峽まで、劍南(四川省)では西山大渡河の東を唐の境界とする。吐蕃の守る鎮は蘭州・渭州・原州・会州であり、西は臨洮(甘肅省)、東は成州(甘肅省)まで、劍南の西は磨些の諸蛮、大渡水の西南を吐蕃の境界とする。

……黄河以北は昔の新泉軍(甘肅省)より北は砂漠まで、南は賀蘭山の駱駝嶺を境界とし、間田(緩衝地帯)では田畑を耕作しない。」となった。唐は、この国境劃定によって吐蕃による河西・隴右の実効支配を承認した。盟約にも「国家務息辺人、外其故地(唐は辺境住民の安寧に務め、旧領を断念した。)⁽²⁰⁾」とあり、唐は旧領(即ち河西・隴右)の領有権を放棄する事を正式に表明している。唐は藩鎮の乱という内患を抱えていた為、吐蕃の侵攻をこの防衛ラインで食い止めたいと考えたのであろう。

盟約では、兵馬処(駐屯軍)に関する規約も定められた。盟文に記載されていない場所にある兵馬処について、吐蕃の兵馬処は吐蕃、唐の兵馬処は唐が各々守備し越境しない事、兵馬処のない所については兵馬処や城塞を新設して耕作しない事が決められた。

また、盟文には明記されていないが、建中三年の交渉と徳宗の勅書「賜吐蕃將書」によって、国境地点の清水などに境界碑が立石された

事が推察される。⁽²¹⁾唐は、目に見える形で国境線を明確化し、吐蕃の国境侵犯を阻止する意図だったと思われる。

この様に、建中会盟では実情に即した国境劃定がなされ、国境侵犯が禁じられた。更に、境界碑の立石、緩衝地帯の設置、⁽²²⁾駐屯軍に関する規定など、国境に関する付帯条項も詳細に取り決められた。安史の乱以後、吐蕃が河西・隴右を占拠し長安が脅威に晒されるようになった事、国内で藩鎮の乱が相次ぎ吐蕃との和平がより重要になった事などから、唐には吐蕃との国境問題の解決と西北辺の安全保障が非常に重要になったと考えられる。

(四) 建中会盟後の唐の軍隊移動と朱泚の乱の勃発

清水で会盟(建中四年正月丁亥)が行われてから三日後の建中四年(七八三)正月庚寅、淮西節度使の李希烈が汝州(河南省)を陥落させた為、正月戊戌(清水会盟から十一日後)、徳宗は哥舒曜を汝州節度使に任命し、鳳翔・邠寧・涇原・奉天・好時の行營兵万余人を統率させて李希烈の討伐に向かわせた(『資治通鑑』卷二二八)。

筆者が注目したのは、哥舒曜の統率する軍隊である。鳳翔・邠寧・奉天・好時(以上陝西省)・涇原(甘肅省)の軍勢はいずれも西北の守備兵で、吐蕃防衛が任務であった。徳宗は既に二年前の建中二年二月、防秋兵を東に移動して河北諸鎮の乱に対処させたが、清水で会盟を締結した事で吐蕃に対する軍事力を更に軽減できるようになった為、西北の守備兵を割いて李希烈討伐に派遣したと考えられる。(表一)で示した様に、唐は常に紛争地に軍隊を集結させており、今回は吐蕃との会盟で西方戦線が終息し、東方に軍隊を移動させたと思われる。

しかし、哥舒曜は建中四年八月丁未、襄城(河南省許昌市)におい

て李希烈が率いる三万の軍勢に包囲された。徳宗は李勉を援軍として襄城に派遣したが、九月、李勉もまた李希烈との戦いに苦闘した為、十月、徳宗は涇原節度使の姚令言に出撃を命じ、五千の兵を統率させて哥舒曜の救援に向かわせた。

着目すべきは、涇原節度使は安史の乱後の大暦三年（七六八）、吐蕃の入寇を防ぐ目的で長安西北に新設された節度使であった（『旧唐書』卷一五二馬磷伝・吐蕃伝）。涇原軍に出撃命令を下す三ヶ月前（建中四年七月）、唐と吐蕃は長安城西で会盟しており、徳宗は吐蕃との和睦は磐石であると判断し、再度吐蕃防衛の為の守備軍を割いて李希烈討伐に派遣したと思われる。

だが、この涇原軍が待遇不満から長安で叛旗を翻した為、徳宗は長安を放棄し、長安西北の奉天（陝西省乾県）に逃亡した。反乱軍は、長安で軟禁されていた朱泚を推戴した。朱泚は長安で即位して大秦皇帝を称し、徳宗が逃げ込んだ奉天を包囲した。

朱泚の乱が勃発後、吐蕃の大相尚結贊は、これを好機と捉えたのか、徳宗に対し、援軍を派遣して長安を回復したいと請願し、興元元年（七八四）正月庚子、徳宗は尚結贊のもとに崔漢衡を派遣して出撃命令を下した（『資治通鑑』卷二一九）。援軍派遣を申し出た吐蕃に対して徳宗が与えた盟約が奉天盟書であった。徳宗は、吐蕃が長安を奪回した場合、褒賞として四鎮と北庭を割譲する事、毎年絹一万匹を贈る事を約した。ただ奉天盟書が下された時期は不明である。劉小兵氏は、徳宗の奉天滞在が建中四年（七八三）十月から興元元年（七八四）二月までである事、徳宗が吐蕃に朱泚討伐を命じたのが興元元年正月である事から、奉天盟書の下された時期を建中四年十月から興元元年正

月であると考察し、筆者もこの考証が妥当であると考える。次章では奉天盟書を取り上げ、吐蕃の援軍派遣等について見る。

第三章 奉天盟書

（一）奉天盟書の内容

奉天盟書に関しては、徳宗の勅書「賜吐蕃宰相尚結贊書・第一書」「賜吐蕃宰相尚結贊書・第三書」「賜吐蕃將書」等で言及されている。これらの勅書は、宰相陸贄の文集『陸宣公翰苑集』卷十や『陸宣公奏議』卷十、或いは『全唐文』卷四六四等に収められている。王素氏は、これらの勅書の発布年代を貞元二年（七八六）と考証している。勅書によれば、徳宗は吐蕃に対して以下の二点を約している。

①吐蕃が長安を奪回した場合、徳宗は報賞として四鎮・北庭を吐蕃に割譲する。

徳宗が尚結贊に下した勅書「賜吐蕃宰相尚結贊書・第三書」には、「至如四鎮北庭、元不割与蕃国。及朱泚悖逆、作乱上都、卿仗義興師、請收京邑、遂許四鎮、北庭之地、將以報答成功。（四鎮・北庭は元々異国に分ち与えるものではなかったが、朱泚が長安で反乱を起こした時、そなたが義に従って軍を起し、長安を奪回したいと請願した為、朕は四鎮と北庭の地を吐蕃が領有する事を許し、吐蕃の功績に応えようと考えたのである。」とある。また、「賜吐蕃將書」には、「往歲賊臣称兵、竊據城闕、尚結贊……頻献表章、請收京邑。朕以宗廟社稷、悉在上都、但平寇戎、豈惜酬賞、遂許四鎮之地、以答收京之功。（先年朱泚が拳兵して宮城を占拠した時、尚結贊は……度々上奏し、長安の奪回を請願した。朕は宗廟社稷が尽く長安にある為、ただ賊軍

を平定できれば、どうして報酬を惜しもうか。朕は吐蕃が長安を奪回した場合、功に応えて四鎮を割譲する事を許可したのである。」とあり、吐蕃軍が朱泚の手から長安を奪回した場合、徳宗は吐蕃に四鎮と北庭を割譲する事を許可している。

四鎮は龜茲・于闐・疏勒・焉耆の安西四鎮であり、北庭はビシュバリクである。いずれも東西交易路の要衝である。広徳元年（七六三）、吐蕃が河西・隴右を軍事占領した為、四鎮と北庭は長安から切り離されたが、四鎮留後の郭昕と北庭節度使の李元忠は、吐蕃軍の攻撃を退けて四鎮と北庭を堅守した。二人は長安への遣使をしばしば試みたが、吐蕃の妨害にあつて果たせなかつた。しかし、長安と隔絶してから十八年後の建中二年（七八一）七月、ウイグル道（天山北路から漠北のオルホン河流域を迂回²⁸）を経由した使節が長安に到達した為、徳宗は喜び、郭昕を安西大都護・四鎮節度使・武威郡王、李元忠を北庭大都護・寧塞郡王となして二人の功績に報いた。だが、二年後の建中四年（七八三）十月、朱泚軍によつて長安を追われた徳宗は、吐蕃が長安領有を渴望していた四鎮・北庭を割譲する事で吐蕃の援軍を獲得し、朱泚から長安を奪還しようと思つた。徳宗が四鎮・北庭の將軍・官吏に与えた勅書「慰問四鎮北庭將吏勅書」（『陸宣公翰苑集』卷十）には、「近以賊臣朱泚背恩、驚犯宮闕、贊普又遣師旅、助討姦兇……已共西蕃定議、兼立誓約、応在彼將士、官吏、僧道、耆壽百姓等、並放帰漢界……待卿等進發、然後以土地隸屬西蕃。（近頃賊の朱泚が恩に背いて宮城を犯し、吐蕃王は援軍を派遣し唐の朱泚討伐に加勢した。……唐は既に吐蕃と相談の上、誓約したので、四鎮と北庭にいる將士・官吏・僧侶・年老いた民達は中国領内に帰国すべきである。……そなた

達が発するのを待つて、その後、四鎮と北庭は吐蕃に隸属させる。）とある。誓約により四鎮と北庭の吐蕃への帰属が決まつた事、徳宗が四鎮・北庭の將吏達に帰国を命じた事が分かる。尚、唐が吐蕃に割譲を約した土地については、『旧唐書』吐蕃伝で吐蕃の大相尚結贊が「涇州と靈州」であると述べ、『新唐書』吐蕃伝では尚結贊が「涇州・靈州等の四州」であると言ひ、『資治通鑑』卷二二一では李泌が「伊西・北庭」もしくは「安西・北庭」であると述べている。こうした記述の相違に關して、佐藤長氏は、唐が割譲を約した地は安西と北庭であろうと考察している²⁹。勅書に記されている事も考慮すると、やはり安西四鎮と北庭が、徳宗が吐蕃に割譲を約した土地であつたと思われる。

ここで、唐が吐蕃に対して領土割譲を約した事が妥当だつたか否かについて考えてみたい。この当時、吐蕃が朱泚に援軍を派遣する可能性もあり、領土割譲の約束が無謀だつたとは言えない、と筆者は考える。実際、朱泚の弟朱滔（盧龍節度使）は、ウイグルから援軍を得て洛陽に進撃し、朱泚と合流する計画であつた。朱滔はウイグルに対し、洛陽を掌握した暁には河南の子女を報酬として与える事を約束しており、建中四年十二月、范陽の歩騎五万、ウイグル兵三千等を率いて河間を發し南下を開始していた（『旧唐書』卷一四三朱滔伝、『資治通鑑』卷二二九）。唐としては、吐蕃を味方にする為には領土割譲を条件にするのも止むを得なかつたと思われる。

②吐蕃軍が長安を奪回した場合、徳宗は褒美として毎年絹一萬匹を吐蕃に与える。

「賜吐蕃將書」には「所論先許毎年与贊普綵絹一萬匹段者、本来立

約亦為収京」とあり、本来の盟約（即ち奉天盟書）では、吐蕃軍が長安を奪回した時、徳宗は毎年絹一万匹を吐蕃王に与えると約した事が分かる。安史の乱の時の至徳二載（七五七）、肅宗は、援軍を派遣したウイグルに対し、毎年絹二万匹を下賜する事を約しており（『旧唐書』卷一九五廻紇伝）、吐蕃への絹一万匹の下賜の約束は、それと同様の措置であった。

（二）吐蕃の唐への援軍派遣・吐蕃軍の撤退・吐蕃と朱泚の交渉

徳宗は興元元年（七八四）正月、河北諸鎮の罪を赦し、彼らの既得權益を認める事で混乱の收拾を図った。これに対し、田悦（魏博）、王武俊（成徳）、李納（平盧）は謝罪したが、盧龍節度使朱滔（朱泚の弟）と淮西節度使李希烈は抗戦を続行した。

同じ興元元年正月、徳宗は吐蕃に出撃を命じ、二月、崔漢衡が吐蕃陣営に赴いて朱泚討伐を促したが、尚結贊は「吐蕃の法では出撃の際には指揮官の命令が必要である」と返答し、制書に唐の將軍李懷光の署名が記されていない事を理由に出撃を拒否した。李懷光は前年の建中四年（七八三）十一月、奉天を包囲中だった朱泚軍を撃破し、徳宗の危機を救った功勞者であったが、徳宗の側近盧杞と対立し、吐蕃への援軍要請にも反対した。その後、李懷光は謀反を疑われた為、興元元年二月、朱泚に寝返って叛旗を翻した。このため徳宗は奉天から梁州（陝西省漢中市）に逃走した（『資治通鑑』卷三三〇）。尚結贊は、或いは李懷光と唐廷の対立を察知し出撃を控えたのかも知れない。

吐蕃軍は、その後、崔漢衡の再度の出撃要請等によって出撃し、興元元年四月、吐蕃の論莽羅は、唐の將軍渾瑊と共に武功（陝西省武功県）の武亭川において、朱泚の將韓旻・張廷芝・宋帰朝を撃破し、一

万余の首級を斬った（『旧唐書』吐蕃伝）。戦勝後、尚結贊は渾瑊に対し、日を決めて共に長安を奪回する事を約した。しかし、朱泚は吐蕃の参戦を恐れ、興元元年五月、部下の田希鑒を吐蕃陣営に派遣して金帛を賄賂として贈った。吐蕃軍は武功の街を略奪した後、陣営が大疫に襲われた事を理由に撤退した。吐蕃軍の撤退を知った徳宗は動揺したが、李晟と渾瑊が朱泚軍を撃破して長安の奪回を果たした。敗残の朱泚は西に逃亡し、吐蕃への亡命を試みたが、興元元年六月、彭原（甘肅省寧県）で部下に殺されて乱は終息した（『資治通鑑』卷三三一、『旧唐書』卷二〇〇朱泚伝）。

吐蕃は、唐と朱泚双方の戦況を見て、優勢な方に味方して高額な報酬を得ようと目論んだのであろう。しかし、この吐蕃の背信行為が唐に不信感を抱かせ、次節で見えるように、唐は奉天盟書の約定の一部（四鎮・北庭の割譲約束）の履行を中止する事になるのである。

（三）唐側の領土割譲の中止と吐蕃の入寇再開

興元元年七月、徳宗が長安に帰還すると吐蕃が約束の領土割譲を求めてきた。しかし、李泌が安西と北庭を吐蕃に割譲する事に反対し、衆議も李泌を支持した為、徳宗は吐蕃への領土の割譲を止めた。『資治通鑑』卷三三一によれば、李泌は「日者吐蕃観望不进、陰持两端、大掠武功、受賂而去、何功之有。（先頃吐蕃は、唐軍と朱泚軍の戦いの形勢を傍観して進軍せず、密かに唐と朱泚のどちらに付くか曖昧な態度を取った。また武功の街を略奪し、朱泚から賄賂を得て退却した。吐蕃に一体何の功績があるのか？）」と言い、吐蕃が朱泚の賄賂を受けて撤退した事などを理由に挙げて、吐蕃への領土割譲に反対した。

吐蕃は徳宗が領土割譲の約束を反故にした事に怒り、大相尚結贊は

自ら軍勢を率い、貞元二年（七八六）八月、涇州・隴州・邠州・寧州を襲撃した。徳宗は渾城に一万、駱元光に八千の兵を統率させて咸陽（陝西省咸陽県）に駐屯させ防備を固めたが、九月、吐蕃軍が好時を攻めた為、長安は嚴戒態勢となり、咸陽への駐屯兵も増派された。若では徳宗が長安から逃亡するのではないかとの噂が流れる程、危機感が募った。

吐蕃軍が襲撃した涇州・隴州・邠州・寧州・好時は、建中会盟の時に定まった国境地点（涇州・隴州・鳳州等）、及び、それよりも東側に位置しており、吐蕃が建中会盟に違約して国境を侵犯した事が分かる。吐蕃軍は更に、十一月に塩州、十二月には夏州・銀州・麟州を占領し、駐屯軍を置いた。塩州・夏州・銀州・麟州（以上陝西省等）も建中会盟で定まった国境地点より東に位置し、この占領もまた吐蕃の国境侵犯となった。

徳宗は吐蕃軍の入寇に対し、鳳翔節度使の李晟、邠寧節度使の韓遊瓌、河東節度使の馬燧らを出撃させた。李晟は貞元二年（七八六）九月、尚結贊を敗走させ、十月には吐蕃の要塞摧砂堡を奪取する等の戦果を挙げた。徳宗は、こうして吐蕃軍に應戦する一方で、尚結贊と和陸交渉を試みた。王素氏は、貞元二年八月〜九月に行われた外交交渉において徳宗が下した勅書が、「賜吐蕃宰相尚結贊書（全三書）」であると考証している。次節では徳宗の勅書を取り上げ、徳宗が奉天盟書の約定のうち、四鎮・北庭の割譲を中止し、絹の下賜だけを許可した理由を考察する。

（四）勅書に見える徳宗の釈明

①領土割譲の約束を反故にした理由

徳宗は、尚覽鑣に与えた勅書「賜吐蕃將書」において「遂許四鎮之地、以答收京之功。旋属炎蒸、又多疾疫、大蕃兵馬便自抽帰。既未至京、有乖始望奉天盟約、豈合更論。（朕は四鎮の割譲を許して吐蕃の長安奪回の功績に應えるつもりでいたが、吐蕃軍は炎蒸と疾疫を理由に撤退した。長安に至る前に吐蕃は最初の望みであった奉天盟約に背いた。今更盟約について論じる必要があるか？）」と述べ、尚結贊に与えた勅書「賜吐蕃宰相尚結贊書・第三書」で「旋属炎蒸、蕃軍便退、奉天之約、豈可更論（吐蕃軍は炎蒸を理由にすぐに撤退した。奉天の盟約を改めて論じる必要があるか？）」と述べている。つまり徳宗は、長安を奪回した場合の成功報酬として四鎮と北庭を割譲するつもりでいた。それ故、長安奪回を果たす前に撤退した吐蕃に対し、領土を割譲しなかったのである。

②絹一万匹の下賜だけを許可した名分

徳宗は絹一万匹の下賜について、「賜吐蕃將書」で「所論先許毎年与贊普綵絹一万匹段者、本来立約亦為收京、然於舅甥之情、此乃甚為小事。……贊普若須繪帛、朕即隨要支分……尚結贊、論莽羅等、嘗給師徒、遠來赴難、功雖未就、義則可嘉、其所領將士等、朕先許與賜物一万匹段。（朕が先に毎年吐蕃王に下賜する事を論じた絹一万匹は、本来の約束では長安を奪回した時に与えるものであった。しかし舅と甥の情において、この様な約束事は些細な事である。……もし吐蕃王が絹を求めるのなら、朕は必要に応じて絹を支払おう。……尚結贊・論莽羅らは、かつて吐蕃軍を率いて遠方より国難を救う為に馳せ参じた。まだ功を成していないが彼らの義は褒めるべきであり、朕は彼らが統率する將兵に対し、先に絹一万匹の下賜を許可した。）」と述べて

いる。つまり、絹に関しては、舅甥関係の誼と吐蕃の将兵の働きへの褒美として、徳宗が下賜したのであった。

唐は安史の乱の時、援軍を派遣したウイグルに対し、褒美として毎年絹二万匹の下賜を約しており、絹の下賜は唐にとっては特殊な褒賞という訳ではなかった。しかし、土地の譲渡は唐にとって後々も脅威となり、将来に禍根を残す可能性がある。賊（朱泚）と通謀する吐蕃に対する不信任もあり、唐は領土割譲を止め、絹だけを吐蕃に与えたと思われる。

（五）唐側の記録での奉天盟書の位置づけ

奉天盟書の名称や、その盟約内容については、『旧唐書』『新唐書』『冊府元龜』『資治通鑑』等の基本史料で明確に記されていない。本節では、唐側の記録における奉天盟書の扱い、奉天盟書が正式な会盟であつたか否かについて考えたいと思う。

徳宗が長安から逃亡中であつた事、吐蕃に助力を懇願した事、領土割譲を約した事など、唐にとっては恥ずべき点が幾つもあった為、奉天盟書は『旧唐書』等の基本史料に記録されなかつた可能性もある。

ただ、『新唐書』吐蕃伝には「朱泚之乱、吐蕃請助討賊……初與虜約、得長安、以涇、靈四州界之。會大疫、虜輒引去。及泚平、責先約求地、天子薄其勞、第賜詔書、償結贊、莽羅等帛萬匹、於是虜以為怨。（朱泚の乱が勃発した時、吐蕃が援軍派遣を請願した。……初め徳宗は、長安を回復したら涇州・靈州等の四州を吐蕃に与えると約した。偶々大病が発生し、吐蕃軍は撤退したが、朱泚の乱が平定すると吐蕃は先約によって土地を要求した。だが、徳宗は吐蕃の働きを軽く見て、ただ勅書を下し尚結贊・論莽羅らに絹一万匹を褒美として与えた。それ

で吐蕃は唐を恨んだ。」とある。この「先約」は、その内容等を考えれば奉天盟書の事を指していると考えられる。

次に、奉天盟書が正式な会盟か否かについて考えてみたいと思うが、筆者は、少なくとも唐側は奉天盟書を正式な会盟とは捉えていなかったと思う。その根拠は以下の三点である。①『旧唐書』『新唐書』『冊府元龜』『資治通鑑』等が奉天盟書を取り上げていない事。②徳宗が逃亡中に行つた非常時の盟約である事。③吐蕃の大相尚結贊が、平涼偽盟の前の会盟として建中四年正月に行われた清水会盟を上げ、吐蕃側も奉天盟書を正式な会盟と見なさず、清水での盟を修める為に平涼でもう一度会盟を行うことになつた点（『旧唐書』『吐蕃伝』）。以上の三点より、唐・吐蕃双方とも奉天盟書を正式な会盟ではないと認識していたと考えられる。

第四章 平涼偽盟とその後の国際情勢

吐蕃の大相尚結贊は、徳宗が領土割譲の約束を反故にした事に激怒し、貞元二年（七八六）八月より自ら軍勢を率い、建中会盟で定められた国境線を侵犯して涇州・隴州・塩州等を襲撃し、徳宗に新たな会盟を結ぶよう迫つた。徳宗は尚結贊の要請に応じ、貞元三年（七八七）閏五月、平涼において吐蕃と会盟を行うが、尚結贊は唐の使節らを襲撃し、使節六十餘名を捕縛し、兵卒五百餘人を殺害するなどした。本章では、平涼偽盟が起こつた歴史背景、偽盟後の唐・吐蕃関係の推移等について考察する。

（一）平涼偽盟の背景と吐蕃の目的

平涼偽盟は、吐蕃の大相尚結贊が計画した。尚結贊は、唐との会盟

を主張して副相から大相に昇進し、建中四年（七八三）清水で唐と会盟した。朱泚の乱の時には徳宗に援軍派遣を申し出て唐に加勢したが、徳宗が領土割譲を中止すると激怒し、唐の西北辺を波状攻撃し、偽盟を企てた。計略に長け、唐の内情に通曉した人物であった。本節では、尚結贊の言動を手掛りに、平涼偽盟を画策した背景を考えてみたい。

（一）偽盟の背景（軍事上・国際情勢上の理由）

尚結贊が偽盟を計画した背景には、軍事上・国際情勢上の理由が考えられる。

唐の宰相韓滉は貞元二年（七八六）、吐蕃が大食・ウイグル・南詔に対して兵力を分散している事、河西・隴右に駐屯する吐蕃軍は五六万に過ぎない事を分析している（『旧唐書』卷二二九韓滉伝、『冊府元龜』卷四四六将帥部生事）。また、『新唐書』卷二二二大食伝と『唐会要』卷一〇〇大食伝によれば、貞元二年、吐蕃は大食と対戦中であった為、軍勢の大半を西方に派遣しており、唐の辺境地帯を略奪する事が少なくなつたという。つまり吐蕃は対大食戦に主力を投入していた為、唐との戦いに十分な兵力を派遣できなかったのである。³⁰これに加えて、唐軍と対峙中だった鳴沙（寧夏回族自治区）の吐蕃陣営では、貞元二年冬から翌年春にかけて羊馬が大量に死んで兵糧が枯渇し、更に唐の応戦体制も強化された為、尚結贊にとつては不利な戦況となつた。この為、尚結贊は謀略として偽盟を画策したと考えられる。

（二）吐蕃側の偽盟の目的——唐の將軍の捕縛・失脚による唐軍の指揮系統の攪乱が目的

尚結贊は宰相や部下に向かつて、「唐の名將は李晟・渾瑊・馬燧だけである。三人を排除しなければ必ずや私の憂いとなるであらう。」

と語っている（『旧唐書』卷二二三李晟伝、『冊府元龜』卷九九八外臣部奸詐・尚結贊、『資治通鑑』卷二二二・貞元二年条）。以下に、李晟・渾瑊・馬燧の経歴、尚結贊が彼らに仕掛けた偽盟及び、その前後の謀略を記す。

李晟は、朱泚の乱の時には渾瑊と共に長安を奪還し、唐では有数の名將であつた。徳宗は長安に帰還後の興元元年（七八五）八月、李晟を鳳翔隴右節度使に任命し、対吐蕃の防衛を任せた。貞元二年（七八六）九月、李晟の部下王泌は尚結贊を撃破し、尚結贊は遁走して辛うじて唐軍の捕縛を免れる程であつた。このため尚結贊は李晟を最も恐れ嫌い、鳳翔攻撃の際に李晟に対して離間策をしかけ、失脚を画策した。十月にも李晟が吐蕃の要塞摧砂堡（甘肅省固原県）を奪取した為、尚結贊は北に撤退し、徳宗に会盟を請願した。しかし、李晟が主戦派の中心人物となつて吐蕃との会盟に反対した為、尚結贊は李晟と不仲であつた馬燧を懐柔し、李晟から兵権を奪い取つた（『旧唐書』李晟伝、『新唐書』卷一五四李晟伝）。

渾瑊は、興元元年（七八四）四月、吐蕃軍と共に武亭川で朱泚軍を撃破しており、尚結贊も渾瑊の実力を熟知していた。尚結贊は平涼で会盟を行うにあたり、徳宗に渾瑊の参加を要請し、その理由として、渾瑊とは協力して朱泚軍を撃破したので、渾瑊の忠信についてはよく知っているとして説明した。平涼会盟の際、尚結贊は金の械を準備し、渾瑊を捕縛して吐蕃王に献上する計画であつたが、渾瑊が逃走した為、尚結贊は渾瑊を捕らえ損ねた（『旧唐書』卷一三四渾瑊伝、『新唐書』卷一五五渾瑊伝、『資治通鑑』卷二二二）。

馬燧は、河東節度使であり、主として河北三鎮の鎮戍戦を指揮した。

貞元二年（七八六）十二月、吐蕃軍が夏州・銀州・麟州を占領したことで、徳宗は馬燧に出撃を命令した。馬燧は李晟とは不仲であり、尚結賛は恐らくその事を察知し、馬燧に賄賂を贈って和を求めた。馬燧は貞元三年（七八七）三月、吐蕃の論頰熱を伴って入朝し、論頰熱と共に徳宗に対し吐蕃との会盟を勧めた。徳宗は、それまで李晟ら主戦派の意見に従って吐蕃との会盟に反対していたが、馬燧の進言に心動かされて会盟を決断した（『旧唐書』卷一三四馬燧伝・吐蕃伝、『新唐書』卷一五五馬燧伝・吐蕃伝、『資治通鑑』卷二二二）。

平涼偽盟の時、馬燧の甥馬弁が吐蕃軍に捕縛され、同じく捕縛された俱文珍・馬寧と共に故原州で尚結賛に会った。このとき尚結賛は馬弁に向かつて、馬燧が見逃してくれたから吐蕃軍が全滅を免れた事、和睦の成立には馬燧の助力があった事などを告げた後、長安への帰還を許した。俱文珍は宦官であり、馬寧は渾瑊の部下であったから、尚結賛の言葉は徳宗の耳に達し、馬燧は責任を問われ、貞元三年六月、兵権を剥奪された（『資治通鑑』卷二二二）。

以上の様に、吐蕃の大相尚結賛が偽盟を企てた目的は、唐の有力將軍を捕縛、もしくは失脚させる事であり、唐の指揮系統を攪乱する事であった。李晟と馬燧が兵権を奪われた事で、吐蕃の謀略は成功したと言える。

尚、尚結賛は貞元三年三月、唐の使者崔澣に対し、靈州節度使の杜希全と涇原節度使の李観も会盟に参加させるよう要請している。徳宗がこれを拒否した為、杜希全と李観は平涼に赴かなかつたが、尚結賛は杜希全と李観も会盟の際に捕縛し、節度使が不在となった靈州と涇州を襲撃し、長安に攻め上る計画だったようである（『旧唐書』吐蕃

伝、『資治通鑑』卷二二二）。

(3) 尚結賛の弁明——建中会盟に違約した理由・新たな会盟を要請する理由

尚結賛は貞元三年（七八七）三月、徳宗に対し、建中会盟に違約した理由、新たに会盟を請願する根拠等を説明した。違約の理由については、朱泚の乱を平定したのに吐蕃はまだ約束の報酬を得ていない事、境界碑が引き倒されていたので両国が国境を侵犯しないか危惧して国境に来た事などを述べて弁明した。また、塩州と夏州の占領については、唐の守将が城を捨てて逃げたのであつて吐蕃が奪取した訳ではないと釈明した。新たな会盟を請願する根拠としては、清水会盟では誓約した大臣の数が少なかった為に会盟が軽んじられた事、新たな会盟で吐蕃は宰相・元帥二十一名を全て参加させる事を主張し、新たに会盟を結ぶ際に塩州と夏州を唐に返還するとも言った（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二二二）。

(二) 唐の内情——和平派と主戦派の対立

この時期の唐は、貞元元年（七八五）に李懐光の乱、貞元二年（七八六）に李希烈の乱が各々平定されて、藩鎮の乱は終息していた。むしろ騒乱の火種は唐の政府内にあり、唐の首脳部は主戦派と和平派に分裂し、吐蕃への対応を巡って対立していた。⁽³²⁾ こうした唐側の内紛が尚結賛に付け入る隙を与えたように思われる。本節では『資治通鑑』卷二二二・貞元三年条等を元に、主戦派・和平派双方の動向、徳宗の思惑等を概観する。

主戦派は李晟（鳳翔隴右節度使）・韓遊瓌（邠寧節度使）・韓滉（宰相）であった。李晟と韓遊瓌は前線指揮官として吐蕃と対戦中であり、

吐蕃を信用せず会盟に反対した。韓滉は河西・隴右に駐屯する吐蕃軍が少ない事を理由に攻勢に出るよう主張した。一方、和平派は張延賞（宰相）・馬燧（河東節度使）であり、吐蕃との和睦・会盟を徳宗に進言した。とりわけ張延賞は李晟と犬猿の間柄であった為、李晟から節度使職を奪って劉玄佐と李抱真に西北辺境の防備を任せたいと考えていた。徳宗は当初、会盟に反対していたが、貞元三年二月に主戦派の後ろ盾であった宰相韓滉が死去した事、三月に馬燧が吐蕃の論類熟を伴って入朝し和睦を論じた事で、吐蕃との会盟に乗り気となった。加えて、徳宗は安史の乱の時に来援したウイグルに侮辱されて以来、ウイグルを嫌っており（『旧唐書』卷一九五廻紇伝）、吐蕃と連繫してウイグルを攻撃したいと考えて、吐蕃との会盟を決断した。

しかし、会盟が決まった後も、唐の將軍の中には吐蕃に対して警戒心を抱く者はおろ、馬有麟（左神策軍の將）は、吐蕃の伏兵を憂慮して平坦な平涼を会盟の地にするよう徳宗に進言し、李晟は、盟会使の渾瑊に警備を厳重にするよう戒め、韓遊瓌と駱元光は、会盟の地から二十餘里の場所に堅固な陣地を築き、兵を待機させて異変に備えた。

（三）平涼偽盟とその後

貞元三年閏五月、渾瑊を盟会使、崔漢衡を副使とする使節一行が、平涼において吐蕃と会盟を行ったが、儀式が始まると、吐蕃軍が唐の使節達を襲撃した。盟会使の渾瑊は単身で逃走し難を逃れたが、副使の崔漢衡を含む使節六十餘名が吐蕃軍の捕虜となり、唐の兵卒五百餘人が殺害され、千餘人が捕縛された。捕縛もしくは戦死した使節の氏名・経歴等については「表三」を参照されたい。これに対し、徳宗は国境付近の潘原（甘肅省）や隴州に將軍を派遣し吐蕃軍の襲撃に備え

させた。また、六月には馬燧から兵権を剥奪し、失策の責任を取らせられた。和平派の宰相張延賞は偽盟の結果に心を病み、七月に死去した。

対する吐蕃は、平涼偽盟の翌月（貞元三年六月）に塩州・夏州を襲撃して唐を威嚇すると共に、八月には崔漢衡に和睦要請の上奏文を持たせ、五十騎に護衛させて国境まで送らせた。しかし、涇原節度使の李観が潘原で一行を止め、「吐蕃の使者を人国させるなどの詔が下った」と告げ、上表文だけを受け取って吐蕃人を追い返し（『旧唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷三三三）、吐蕃の和睦要請を拒否した。

（四）吐蕃軍に捕縛された捕虜の命運（表三も参照）

平涼偽盟の時に吐蕃軍に捕らえられた唐の使節達のその後の運命は面白いものであり、ここで、捕縛された使者のうち、史料で経歴の分かるものを幾人が取り上げたいと思う。

崔漢衡・俱文珍・馬寧・馬昇は、先述の様に捕縛されたが、その後、尚結贊から長安への帰還を許された。崔漢衡は吐蕃の和睦要請の上奏文を持って帰国させられ、俱文珍・馬寧・馬昇は馬燧を失脚させる目的で尚結贊が帰国させた。

嚴懷志（涇州の裨將）は吐蕃に十餘年間留まった後、脱走し、天竺（インド）・占城（ベトナム）を経由して海路より温州に到達し、貞元十四年（七九八）、長安に帰還したが、徳宗は嚴懷志が宮城外に出る事を望まず、仗内（宮殿の兵衛内）に閉じ込めた。呂温（崔漢衡の部下）も吐蕃軍に捕縛後、久しくして帰還したが、徳宗はこれも仗内に入れた。この様に徳宗によって仗内に幽閉された吐蕃からの帰還者は十六人であったが、徳宗崩御の一ヵ月後の貞元二十一年（八〇五）二月、順宗は十六人を釈放した（『旧唐書』卷十四順宗紀、『冊府元龜』

卷一八一帝王部疑忌、卷九四〇総録部患難。徳宗は偽盟での恥が外部に洩れる事を恐れて帰還者を拘束し、順宗は即位直後の恩赦で彼らを釈放したと思われる。

路泌（副元帥判官）は捕縛後、吐蕃で死去したが、息子の路隨は吐蕃から和陸要請の使者が来るたびに徳宗や憲宗に吐蕃との和陸を請願した。憲宗は、吐蕃が会盟を要請したので、路隨の願いも聞き入れる形で、会盟の条件として平涼偽盟時の捕虜を返還するよう吐蕃に要求した。偽盟から二十三年後の元和五年（八一〇）五月、吐蕃は捕虜を帰国させ、物故した路泌と鄭叔矩（会盟判官）については遺骸を棺に入れて唐に返した（『旧唐書』卷十四憲宗紀、卷一五九路隨伝、『白氏長慶集』卷五六、『白氏文集』卷三九）³⁹「與吐蕃宰相鉢蘭布勒書」「與吐蕃宰相尚綺心兒等書」。

扶餘準は捕縛後、吐蕃で羊馬の放牧をさせられた。元和十二年（八一七）、烏重珣が吐蕃王チデノンツェンを弔問する為にラサに至った際、扶餘準の生存を知り、餘準を長安に連れ帰った（『新唐書』吐蕃伝、『冊府元龜』卷四四四將帥部陷没）。

平涼偽盟で捕えられた捕虜の問題は順宗や憲宗の時代に至っても根深く残り、憲宗の代になっても、新たな会盟の条件として吐蕃に対し平涼偽盟の時の

表3：平涼偽盟で吐蕃軍に捕縛・殺害された唐の使節達

	氏名	官職等	会盟に参加した理由、平涼偽盟の時、及び、その後の行動など	史料
逃走し吐蕃の捕縛を免れる	渾瑊	平涼盟会使	尚結贊が徳宗に要請した為、渾瑊が盟会使に任命された。尚結贊の魂胆は、渾瑊を金の鎖で縛って吐蕃王に献上する事だったが、渾瑊は逃走し、吐蕃軍の捕縛を免れた	『旧』『新』渾瑊伝、吐蕃伝
捕虜となるが尚結贊の恩恵で帰国を許される	崔漢衡	盟会副使	豊富な吐蕃との交渉経験と語学力ゆえ、副使に任命されたと思われる。平涼で吐蕃兵に殺されかけるが、チベット語で尚結贊との親交を訴えた為、殺害を免れ捕虜となる。尚結贊は、貞元3年8月、崔漢衡に上表文を持たせて帰国させ、徳宗に和陸を請願	『旧』『新』崔漢衡伝、吐蕃伝
	馬寧	渾瑊の部下	3人とも吐蕃軍に捕まる。尚結贊は馬寧の失脚を画策し、馬寧・俱文珍の前で馬寧に向かって故意に「馬寧のお陰で全滅を免れた」と告げ、馬寧・俱文珍らを釈放した。徳宗は尚結贊の言葉を聞いて馬寧を憎み、貞元3年6月、馬寧から兵権を剥奪した	『冊』981、『通鑑』232
	俱文珍	宦官		
	馬寧	馬寧の甥		
戦死	韓奕	判官	渾瑊の幕僚ゆえ同行。吐蕃軍に襲撃されて戦死	『旧』吐蕃伝、『冊』981
	宋鳳朝	監軍	吐蕃軍に襲撃されて戦死	
捕虜となる	袁同直	掌書記	渾瑊の幕僚ゆえ同行。吐蕃軍に捕まる	
捕虜となった後、吐蕃から帰還するが、徳宗が幽閉、順宗が釈放	嚴懷志	涇原の裨將	捕虜となって吐蕃に10数年間留まった後、脱走し、天竺・占城等を経由して海路より温州に達し、貞元14年（798）、長安に帰還したが、徳宗は嚴懷志が宮城外に出る事を望まず、仗内（宮殿の兵営内）に閉じ込めた。貞元21年（805）2月（徳宗崩御の翌月）、順宗によって釈放され、中郎將に任じられた	『旧』14順宗紀、『冊』181帝王部疑忌、940総録部患難
	呂溫	崔漢衡の部下	崔漢衡を庇って背中を斬られるが、吐蕃兵はその忠義に感服し呂溫を殺さず捕虜とした。仏法を尊び吐蕃で僧となる。吐蕃に長く滞在した後、帰国できたが、徳宗によって仗内に閉じ込められる。徳宗の崩御後、順宗に釈放され、中郎將に任じられた	
捕虜となり吐蕃で死去。元和5年（810）遺骸が棺に入れられて帰還	路泌	副元帥判官	渾瑊の幕僚ゆえ同行。平涼で吐蕃軍に捕まり、吐蕃で死去。息子の路隨は、吐蕃から和陸を求める使者が来るたび徳宗及び憲宗に上表して吐蕃との和陸を請願した。吐蕃が会盟を要請したので、憲宗は路隨の願いも聞き入れる形で、会盟の条件として平涼偽盟で捕縛した唐の使者を返還するよう要求した。吐蕃はこれに応じ、元和5年（810）5月、路泌の遺骸を棺に納めて唐に返還した	『旧』14憲宗紀、159路隨伝、『白氏長慶集』56「與吐蕃宰相鉢蘭布勒書」「與吐蕃宰相尚綺心兒等書」
	鄭叔矩	会盟判官	崔漢衡の判官ゆえ同行し、吐蕃軍に捕まる。元和5年5月、鄭叔矩の棺が帰還	
捕虜となり、元和12年帰国	扶餘準	朔方の騎兵	捕虜となった後、吐蕃で羊馬の放牧をやらされた。815年にチデノンツェンが死去し、817年（元和12）烏重珣が弔問の為に来て扶餘準の生存を知り、長安に連れ帰った	『新』吐蕃伝、『冊』444將帥部陷没

※上記の他にも、孟日華・李至言・楽演明・范濟（以上は武人）、劉延邕・李朝清（以上は宦官）ら60餘人が吐蕃軍に捕らえられた。

※孟日華と劉延邕は、貞元3年8月、崔漢衡と共に帰国（『新唐書』吐蕃伝）。

史 恣 捕虜の返還を要求している。

(五) 唐の反撃——吐蕃包圍作戦(ウイグル・南詔との和睦・連繫)

平涼偽盟以後の唐は、辺防強化と吐蕃に対する包圍網の形成によって軍事的・外交的に吐蕃への対抗を試みた。本節では吐蕃に対する唐の反撃について見る。

(一) 辺防強化

平涼偽盟から二ヵ月後の貞元三年(七八七)七月の時点で、関東から徴集された防秋兵は十七万に達しており(『資治通鑑』卷二二二)、唐が貞元二年八月以降の吐蕃の入寇に備えて辺防を強化している事が分かる。また、唐は西北辺(平涼・塩州等)の城塞を修復もしくは新設して吐蕃の襲撃に備えた(『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝)。

(二) 李泌の吐蕃包圍作戦——ウイグル・南詔・大食・天竺との連繫

平涼偽盟から四ヶ月後の貞元三年九月、宰相の李泌は、ウイグル・南詔・大食・天竺と連繫して吐蕃を牽制しよう徳宗に進言した(『資治通鑑』卷二二二)。この献策の背景としては、先述の様に主戦派の宰相韓滉が、偽盟前年の貞元二年、吐蕃が大食・ウイグル・南詔に兵力を分散している事を指摘し、吐蕃との会盟自体に反対していた。また、貞元初に劍南西川節度使に就任した韋皋は、東蛮を降服させる等して南詔を帰順させる為の布石を打ち、貞元三年正月、徳宗に南詔懐柔策を上奏していた(『旧唐書』卷二四〇韋皋伝)。李泌は、韓滉の指摘や韋皋の成果を踏まえて吐蕃包圍作戦を立案したと思われる(35)。

尚、吐蕃の近隣諸国と連繫して吐蕃を牽制する外交戦略は、玄宗が開元二十六年(七三八)、南詔やソグディアナ諸国を懐柔し実行した(36)。

李泌は対ウイグル政策において「開元の故事」を採用しよう徳宗に進言しており、開元期の玄宗の外交政策を模範にしていた(『新唐書』卷二二七回鶻伝)。李泌は、玄宗の吐蕃包圍作戦にも影響を受け、吐蕃包圍網の構築を提唱したのかも知れない。徳宗は李泌の吐蕃包圍作戦に基づき、翌年の貞元四年(七八八)、ウイグルに娘の咸安公主を降嫁させ、貞元十年(七九四)正月には南詔と会盟し、吐蕃の孤立化を図った。以下にウイグル・南詔・大食・天竺に対する唐の融和策・懐柔策を記す。

① ウイグルとの和睦(咸安公主の降嫁)

徳宗時代の唐とウイグルの間には、主として三つの障害、即ち、徳宗のウイグル嫌い、建中元年(七八〇)に起こった唐によるウイグル使節董突の殺害、ウイグルの朱滔支援があり、両国の外交関係は良好とはいえなかった。しかし、李泌の説得によって徳宗はウイグルとの和睦を決断し、平涼偽盟の翌年の貞元四年(七八八)、咸安公主を天親可汗に降嫁させた。尚、唐がウイグルと連繫して吐蕃を撃退した事は過去にもあり、永泰元年(七六五)十月の僕固懷恩の乱の時、郭子儀はウイグルと会盟して連合し、吐蕃軍を撃退している(『旧唐書』廻紇伝、『新唐書』回鶻伝)。咸安公主が降嫁した翌年の貞元五年(七八九)、ウイグルと吐蕃との間で北庭の領有を巡る戦いが始まった(38)。北庭は東西交易路の要衝であり、吐蕃とウイグルは長年その掌握を試みていた。貞元五年(貞元七年(七九二)、吐蕃・ウイグル間で北庭争奪戦は熾烈を極めたが、戦いは貞元七年、ウイグルの勝利によって決着がついた。ウイグルは貞元七年八月、唐に遣使して戦勝を報告し、吐蕃人捕虜を献上した。ウイグルは靈州に入寇した吐蕃軍も撃破し、

貞元七年九月、靈州で捕らえた吐蕃人捕虜を徳宗に献上した。また、ウイグルは十二月にも捕縛した吐蕃の**大首領尚結心**を献上したが、この時、徳宗は延喜門まで出向いてウイグル使節を迎えた（『旧唐書』廻紇伝、『資治通鑑』卷二二二）。

ウイグルが唐に戦勝を報告して吐蕃人捕虜を三度も献上している事、徳宗がウイグルの使節を自ら出迎えている事などから推察して、唐とウイグルは非常に良好な親善関係を構築していた事が分かる。吐蕃を軍事的・外交的に牽制する為に、唐もウイグルも互いの親睦関係を利したと思われる。ウイグルは北庭掌握後ほとんど入寇せず、毎年**の様に朝貢した為**、唐は北方への軍事的負担が軽減され、吐蕃対策に集中できたと考えられる。

②南詔との会盟（貞元会盟）⁽⁴⁰⁾

玄宗は、開元二十六年（七三八）、南詔王を冊立して親唐国家となし、吐蕃を牽制したが、その後、唐の失策により、天寶十一載（七五二）、南詔は吐蕃に帰順した。南詔は吐蕃と連合して唐を脅かしたが、吐蕃からは重い賦役を課され、戦争の際には常に先鋒を命じられた。

この様な庄政に加え、吐蕃が南詔の大臣の子息を人質にした為、南詔王**異牟尋**は吐蕃への不満と怒りを募らせていた。貞元初に劍南西川節度使に就任した**韋皋**は、異牟尋に遣使を繰り返し、唐への帰順を説得すると共に、吐蕃に対しても南詔の偽書を送り、南詔への猜疑心を煽って南詔・吐蕃間に楔を打ち込んだ。また、韋皋は貞元八年（七九二）から貞元九年（七九三）にかけて吐蕃軍を撃破し、將軍を捕縛する等の戦果を挙げ、西山の羌族を帰順させた。この様な唐の戦果を見た異牟尋は、貞元九年四月、韋皋に遣使して唐への帰順を請願した⁽⁴¹⁾

（『旧唐書』卷一九七南詔蛮伝、『新唐書』卷二二南詔伝）。尚、この時期、吐蕃はウイグルとの北庭争奪戦で多数の死傷者を出した為、南詔に過度な援軍派遣を強要した。異牟尋はこれに激怒し、自ら軍を率いて吐蕃を攻撃し、鉄橋等十六城を奪取して五王を捕らえ、十餘方を降服させると、唐に遣使して戦勝を報告した（『旧唐書』新唐書南詔伝、『資治通鑑』卷二三四）。吐蕃がウイグルとの戦いに大敗した事（軍事上の理由）、ウイグルが唐と和睦した事（外交上の理由）⁽⁴²⁾も、異牟尋が吐蕃からの離反を決断する要因になったと考えられる。

異牟尋が唐に帰順した翌年の貞元十年（七九四）正月、唐と南詔は会盟（貞元会盟）を行った。盟約内容は、『蛮書』卷十に記されている⁽⁴³⁾。盟約には吐蕃に関する決め事もあり、「如会盟之後発起二心、及與吐蕃私相会合、或輒窺侵漢界内田地、即願天地神祇共降災罰、宗祠殄滅、部落不安、災疾臻湊、人戸流散、稼穡產畜、悉皆滅耗。（南詔が会盟後、もしも二心を抱いて吐蕃と密かに会合し中国領内の耕地を侵略するような事があれば、唐は天神地神が共に南詔へ災罰を下さん事を願う。南詔の宗祠は残らず滅び部落は安定せず、災難と病いが集まって人口は流散し、作物と家畜はみな悉く減少し消耗する事になるう。）」と記されている。唐にとっては、南詔と吐蕃の連合阻止が会盟の主目的であった事が分かる。

③大食との交渉（使節の来朝と官位授与）

唐と大食との親睦については、『新唐書』大食伝に「貞元十四年（七九八）、大食が使者の含嗟・烏鷄・沙北の三人を来朝させたので、徳宗はみなに中郎将を拜して帰国させた」と見え、唐が大食と友好関係の樹立を図っていた事が伺える。

④天竺

この時期の唐・天竺間の和陸交渉や連繫を記す史料はない。ただ『新唐書』卷二二「摩揭它伝」に「徳宗は自ら鍾の銘文を記して那爛陀祠（ナーランダ寺院）に賜った」とある。これは、徳宗が天竺に対して行った親善外交の一端を示しているのかも知れない。

以上の様に、平涼偽盟後の唐は、ウイグル・南詔・大食に対し積極的に和陸交渉や懐柔策を実行した。大食とは実質的な連繫はなかったようであるが、ウイグルと南詔を自陣営に取り込んだ事で、唐は、吐蕃に対して軍事的・外交的な打撃を与える事に成功した。

(六) その後の唐・吐蕃関係

吐蕃王チソンデツェンは、貞元十三年（七九七）正月、遣使して和親を請願したが、徳宗は吐蕃がしばしば盟約に背く事を理由に和陸を許さず、吐蕃王の上表文さえ受け取らずに使者を帰国させた（『旧唐書』徳宗紀・吐蕃伝、『資治通鑑』卷二三五）。吐蕃では、前年の貞元十二年（七九六）に大相の尚結賛が死去した（『新唐書』吐蕃伝）。チソンデツェンは名宰相を失った不安から唐との和平を希望したのであるが、この時期の唐は既にウイグル・南詔と連繫し、国内情勢も安定しており、吐蕃とあえて和する必要がなかった。吐蕃では、貞元十三年、尚結賛に次いでチソンデツェンも死去し、長男のムネツェンポが王位を継承したが、ムネツェンポも一年後の貞元十四年（七九八）に死去した為、チソンデツェンの次男チデソンツェンが即位した（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝）。大相と二人の王が相次いで死去した事で国内情勢が不安定になったのに加え、吐蕃は、貞元十六年（八〇〇）南詔に敗北し、翌十七年（八〇一）には劍南方面で南詔の援軍も

得た唐軍に大敗した為、北方戦線の靈州・朔方を攻撃中の吐蕃軍も南方戦線に投入して退勢挽回を図らねばならなかった（『旧唐書』吐蕃伝）。吐蕃は、こうした国内情勢の不穏、軍事・外交の不振から、唐との関係改善を望み、貞元十九年（八〇三）五月、論頰熟を唐に派遣した。徳宗は、同年六月、吐蕃との交渉経験が豊富だった薛伾⁽⁴⁾を答礼として吐蕃に派遣し、唐・吐蕃間の使節の往来が再開して、貞元二十年（八〇四）、チソンデツェンとムネツェンポの死がようやく唐に伝わった（『旧唐書』吐蕃伝）。

尚、余談ではあるが、『日本後紀』卷十一・延暦二十四年（八〇五）六月乙巳条に記された遣唐使の帰国報告で吐蕃情勢が語られており、貞元十九年に吐蕃に派遣された「薛蕃」（正しい名は薛伾）が吐蕃で拘束された事など、漢文史料に記載のない貴重な情報も含まれている。⁽⁴⁾吐蕃の情報は、外国使節の耳に届く程、重要な唐の外交問題になっていったようである。

最後に、徳宗以降の唐・吐蕃間の会盟の為の交渉を簡単にまとめておく。憲宗は、中央集権化を志し、徳宗を見習って即位直後の元和元年（八〇六）、吐蕃に捕虜を返還し（『冊府元龜』卷四二帝王部仁慈）吐蕃との和睦を試みた。これに対し、吐蕃が会盟を請願したので、憲宗は、平涼偽盟時に捕縛した唐の使節を帰国させる事と長安西北の三州（安楽州・原州・秦州）を返還する事を会盟の条件として提示した。吐蕃は元和五年（八一〇）、路泌と鄭叔矩の棺を返して捕虜の返還には応じたが、三州の返還には応じず、会盟の締結には至らなかった（『旧唐書』憲宗紀・吐蕃伝、『白氏文集』卷三九「與吐蕃宰相鉢闡布勅書」等）。その後、穆宗が長慶元年（八二一）五月、ウイグルに太

和公主を降嫁させると、吐蕃は唐とウイグルの親善関係が強化された事に危機感を煽られ、六月、青塞堡を襲撃して唐に会盟を迫った。穆宗は吐蕃の会盟要請に応じ、九月、長安で会盟し、翌年の長慶二年（八二二）にはラサで会盟した（『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝）。これが、最後の唐・吐蕃会盟となる長慶会盟であり、この盟約を刻んだ碑がラサにある唐蕃会盟碑である。

おわりに

安史の乱以前にも、唐は、吐蕃と二度の会盟（神龍会盟・開元会盟）を行っている。その主な目的の一つは、北方の突厥と西方の吐蕃に対する二正面作戦を回避し、北方での戦いに兵力を集中し戦局を有利に展開する事にあつた。⁽⁴⁶⁾安史の乱以前の強大な唐にとっては、吐蕃との会盟は、「軍事力の行使」や「経済力を背景とした懐柔策」など、数ある対外政策の選択肢のうちの一手段というレベルであつたと思われる。

しかし、安史の乱勃発後は、状況は一転する。安史の乱により唐朝の政治的・軍事的な支配体制は壊滅的な打撃を被つた。西方の吐蕃は、唐軍が安祿山討伐の為に軍勢を東方に移動した隙を衝いて、河西・隴右を占領してしまう。安史の乱の終結後も、唐の弱体化は国内に反側藩鎮を複数生み、その反乱を誘起するなど、唐王朝の危機的状況が続く。この様な状況下で、唐は、吐蕃の更なる進攻を抑える為に、或いは藩鎮の反乱を鎮定する為に、更には他の反側藩鎮を牽制する為に、吐蕃との和睦を望み会盟を行った。従つて、安史の乱後の唐・吐蕃会盟は、唐にとっては、単なる対外政策ではなく、存亡にも関わ

る極めて重要な案件であつた。その事は、締結の際の綿密な協議や、盟約内容の詳細化等にも見て取れる。実際、比較的大枠を規定した安史の乱以前の会盟に比べ、安史の乱後に行われた建中会盟では、唐・吐蕃間で綿密な協議がなされ、まず国境の清水で、次いで長安、最後にラサと計三回も会盟が行われ、詳細な国境線を定める等、より厳密で実際の取り決めが盟約に明記された。しかも、従来とは異なる対等に近い立場での会盟であり、国境劃定でも、唐は吐蕃による河西・隴右の領有を正式に承認し、吐蕃側に大きく譲歩している。安史の乱以後の唐にとっては、吐蕃との和睦が死活問題になつていた事が伺える。

唐は、吐蕃との会盟（建中会盟）によって内憂外患のうちの外患を抑え、内憂の解消に努めた。しかしその後、反側藩鎮の朱泚が蜂起し長安を占領した為、唐は吐蕃に奉天盟書を与え、絹の下賜と領土の割譲を約束して朱泚討伐の為の援軍を吐蕃から借りた。だが、吐蕃は、唐と朱泚を両天秤にかけ、朱泚からの贈賄を受けると撤退してしまう。これは唐から見れば約束の不履行であり、それ故、唐は吐蕃への領土割譲を中止した。これに激怒した吐蕃は、偽盟の画策と急襲をもって唐に報復した。平涼偽盟は、吐蕃による、ある種の奇襲攻撃であり、これによって吐蕃は唐の有力將軍を二人失脚させ、使者六十餘名を捕縛する事に成功した。尚、余談ではあるが、平涼偽盟の時に吐蕃軍に捕らえられた唐の使者・嚴懷志は、自力で吐蕃から脱走し、天竺（インド）・占城（ベトナム）を経由し、南海交易ルートを利用して唐に帰国した。七世紀の義浄が既に南海交易ルートを経て海路で唐・天竺間を往復しているが、この当時、一介の脱走者が利用できる程、南海

を經由する貿易路・交通路が充実していた事を示しており興味深い。平涼偽盟は、吐蕃にとって明らかに外交上の失策であった。偽盟で吐蕃に欺かれた唐は、この後、一転してウイグルや南詔と連繫し、対吐蕃包圍網を形成していく。唐は、外交を巧みに展開する事で軍事的な弱点をカバーし、難局を乗り切ろうとしたのである。その結果、吐蕃の方は、対外的に唐・ウイグル・南詔連合によって包圍されて孤立してしまう。国内でも有能な王と大相が相次いで死去した事で内政不安に見舞われ、今度は吐蕃の方が唐との会盟によって内憂外患を乗り切ろうと試みるようになる。

安史の乱以前の唐から見た東アジア世界は、大まかには内（唐王朝）と外（周辺国家）といった比較的シンプルな二重構造であり、周辺国家は、国内支配の権威付けの為、或いは、周辺国家同士の競合で優位に立つ為に、唐の威光や軍隊などを利用した。新羅などが、その好例である。しかし、安史の乱以降、唐は内側にも反唐的な独立勢力（＝藩鎮）を抱えるようになり、唐は内政を再建する為にも外交をより重要視せざるを得なくなった。内を保つ為に唐は、多大な譲歩をしてまで、吐蕃と会盟し、西北辺の安全確保や吐蕃の軍事力の利用を図ったと言える。

徳宗期前半、唐内の独立諸勢力である藩鎮は、唐王朝の支配強化策に対して激しく反発し、既得権益の維持の為に吐蕃やウイグルとの接触を試みた。唐および藩鎮は、この時期、競合者に打ち勝つ為に吐蕃の力を利用しようとし、その軍隊を借りる為に吐蕃との和を図った。中華領内の勢力が、対外勢力の力を借りて伸張を図るという方法は、五代において、より明確な形で再現された。後晋は、契丹に援軍を懇

願する見返りに領土の割譲を約束し、後世に禍根を残す事となった。建国当初の唐も、北方の突厥に臣従し、突厥から援軍を借りて国内の競合者を制圧したが、国内統一後、太宗は突厥を討滅して将来への禍根を断っている。しかし、五代以後、「中華が周辺国家と和を結び、権威付けをし、支援することで中華勢力の外縁部に組み込む」という従来の構図は逆転し、「周辺国家（契丹）が、中国国内の諸勢力の伸長をバックアップし、主導権を握る」という構図が出現し、征服王朝（遼王朝）の成立へと繋がっていく。そして、その後の東部ユーラシアの勢力関係の構図は、中華勢力（宋）と周辺勢力（遼・金・西夏等）が拮抗するという形で長期間定着していくのである。

註

- (1) 劉小兵「唐、蕃和盟關係研究」『雲南社会科学』一九八九年第五期、五八～五九頁。
- (2) 玄宗時代の開元会盟の時も、長安とラサで会盟が行われたようである。拙稿「唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義——安史の乱以前の二度の会盟を中心に」『日本西蔵学会々報』五六号、二〇一〇～三三～三八頁。
- (3) 日野開三郎「唐代藩鎮の支配体制」『東洋史学論集第一卷』（三一書房、一九八〇）、余衍福編『唐代藩鎮之乱』上（連邦書局、一九八〇）、大澤正昭「唐末の藩鎮と中央権力——徳宗・憲宗朝を中心として」『東洋史研究』三三卷二号、一九七三）等。
- (4) (一) 参照、王素『陸贄評伝』（南京大学出版社、二〇〇一年）三〇一～三〇九頁。
- (5) 佐藤長氏（『古代チベット史研究』下、東洋史研究会、一九五九）、築山治三郎氏（『唐代中期における外寇と会盟について』『古代文化』四〇巻一号、一九八八）は建中会盟と平涼偽盟を取り上げているが、奉天盟書については言及していない。

- (6) 佐藤(5)論文は平涼偽盟と称する。筆者もこれに従った。
- (7) 『資治通鑑』卷二二四、呉延燮『唐方鎮年表』全三卷（中華書局、二〇〇三）。
- (8) 『資治通鑑』卷二二四・大曆六年八月条の胡三省の注に「秋高馬肥、吐蕃數入寇、唐歲調關東之兵、屯京西以之、謂之防秋。」とある。防秋兵については曾我部靜雄「唐の防秋兵と防冬兵（上）」『集刊東洋学』四二二号、一九七九、「唐の防秋兵と防冬兵（下）」『集刊東洋学』四三三号、一九八〇）を参照。
- (9) 高瀬奈津子「楊炎の兩税法施行と政治的背景」（『駁台史学』一〇四号、一九九八）。
- (10) 徳宗は即位当初、ウイグルに遣使して旧好の修復を図っており（『旧唐書』卷一九五廻紇伝）、対外的には融和策で臨んだ事が分かる。
- (11) 「俾釈俘隸、以歸蕃落、蕃国展礼、同茲叶和、行人往復、累布成命、是必詐謀不起、兵車不用矣。彼猶以兩國之要、求之永久、古有結盟。」（『旧唐書』吐蕃伝）
- (12) 胡三省は『資治通鑑』卷二二六の注で、吐蕃の遊騎が劉文喜を支援する為に涇州に到来したとの「鄒志」の記事を紹介してはいる。だが、故三省は、この時、吐蕃は唐と通好していたので劉文喜を支援しなかったと考察している。
- (13) 山口瑞鳳『チベット・下』（東京大学出版会、一九八八）四五頁。
- (14) 金子修一『隋唐の国際秩序と東アジア』（名著刊行会、二〇〇二）一四七～一五〇頁。
- (15) 楊炎は、建中元年（七八〇）原州に要塞を構築して吐蕃への防備強化を計画する等、吐蕃に対して強硬策で臨んでいた。
- (16) 景龍二年（七〇八）は中宗時代。中宗の神龍二年（七〇六）唐と吐蕃は初めて会盟し（神龍会盟）、景龍四年（七一〇）金城公主が降嫁した。尚、文成公主と金城公主が吐蕃に降嫁した事で、唐と吐蕃は舅甥関係にあった。
- (17) 胡三省は『資治通鑑』卷二二七の注に「關東河北方用兵、不暇與吐蕃較也」と記し、唐は關東・河北の藩鎮の乱に兵力を投入していた為、吐蕃と争う余裕はなかったと分析している。
- (18) 市原亨吉他著『礼記』上（集英社、一九七六）三四三頁。
- (19) 拙稿(2)論文三七頁。
- (20) 佐藤長訳注「吐蕃伝（旧唐書・新唐書）」（『騎馬民族史3』平凡社、一九七三）一六六頁。
- (21) 拙稿(2)論文三八～三九頁。
- (22) 境界碑は開元会盟で初めて建てられた（拙稿(2)論文三七～三八頁）が、開元会盟の時の国境は赤嶺（青海東南）のみであり、建中会盟ほど厳格・複雑ではない。
- (23) 佐藤(5)論文六一四頁、拙稿(2)論文三九～四〇頁。
- (24) 鳳翔節度使の朱泚は、弟の朱滔が建中三年（七八二）四月に反乱を起こした為、朱滔との共謀を疑われて兵権を剥奪され、長安の私邸に幽閉されていた。
- (25) 朱泚の乱の勃発直後、隴州で朱泚の部下牛雲光が蜂起を図った為、隴右管田判官の韋臯は吐蕃に救援を要請した（『資治通鑑』卷二二八）。建中会盟によって唐が吐蕃と和睦していたので、韋臯は吐蕃に支援を求めたと思われる。
- (26) (一)を参照。
- (27) 王(4)文献一六七頁、三〇一～三〇九頁、王素點校『陸贄集』上（中華書局、二〇〇六）三〇三～三二三頁等。
- (28) 森安孝夫「ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」（『東洋学報』五五巻四号、一九七三）六〇頁。
- (29) 佐藤(5)論文六四一～六四二頁。
- (30) 佐藤(5)論文六五二～六五三頁。
- (31) 拙稿(2)論文三八頁では、この境界碑を清水碑石と推察したが、この碑が塩州・夏州に近い場所にあったとすると、賀蘭に建てられた境界碑であった可能性もある。
- (32) 佐藤(5)論文六四五頁、築山(5)論文三五頁。
- (33) 白居易原著・岡村繁著『白氏文集七・上』（明治書院、二〇〇八年）二〇八～二一六頁、二八一～二八八頁。
- (34) 曾我部(8)論文（下）四七～四八頁。

- (35) 林謙一郎氏(『南詔王権の確立・変質と唐・吐蕃関係』『唐代史研究』一二号、二〇〇九、六八頁)は、韋皋の情報が李泌の吐蕃戦略の根拠になったと考察している。
- (36) 開元期の唐の吐蕃包囲網については、拙稿「八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢」(『史窓』六七号、二〇一〇)。尚、憲宗の元和三年(八〇八)にも、李絳が「唐とウイグルが連合すれば吐蕃を牽制できる」と上奏している(『新唐書』回鶻伝)。
- (37) 突董殺害事件について、徳宗はウイグルに絹十万匹、金銀十万兩を贈って償った(『旧唐書』卷一二七源休伝、羽田亨「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集・上・歴史篇』東洋史研究会、一九五七、二一〇頁、林俊雄「ウイグルの対唐政策」『創価大学人文論集』四号、一九九二、一二六頁)。尚、朱滔については、貞元元年(七八五)に病死し、乱は終息していた。
- (38) 森安(28)論文。
- (39) 林俊雄(37)論文。林氏は、ウイグルは、入寇略奪による収奪よりも、唐との絹馬交易を重視したと考察している。
- (40) 本稿では、貞元十年の唐・南詔会盟を年号で呼ぶ。小幡みちる「唐代会盟儀礼にみえる宗教と国際関係——唐・南詔間の貞元会盟を中心として」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四分冊「四八号、二〇〇二)も参照。
- (41) 吐蕃と南詔の関係については、藤澤義美『西南中国民族史の研究——南詔国の史的研究』(大安、一九六九)、林謙一郎(35)論文等を参照。
- (42) 貞元五年(七八九)二月、韋皋は異牟尋に書を送り「ウイグルはしばしば天子を助けて共に吐蕃を滅ぼしたいと請願しています。王も早く方針を定めないで、ウイグルに先を越され、代々の功名も虚しく忘れ去られてしまいますよ。」と言ってウイグルへの競争心を煽り、南詔に帰順を促している(『資治通鑑』卷三三三)。
- (43) 樊綽撰、向達校注『蛮書校注』(中華書局、一九六二)二六五頁、廖德広『南詔国史探究』(雲南民族出版社、二〇〇六)一〇〇—一〇三頁。
- (44) 薛伾は、建中四年、李揆と共に吐蕃に派遣され、朱泚の乱の時に援軍として到来した吐蕃軍を朱泚軍との決戦場武功(陝西省)に先導した(『旧唐書』卷一四六薛伾伝)。
- (45) 山内晋次「延暦の遣唐使がもたらした唐・吐蕃情報——『日本後紀』所収「唐消息」の基礎的研究」(『史学雑誌』一〇三卷九号、一九九四)。
- (46) 拙稿(2)論文、(36)論文。
- 〔付記〕『日本後紀』所収の遣唐使の帰朝報告については、東洋大学の森公章教授より御教示を賜りました。末筆ながら深く感謝致します。